
『文集百首』における白居易の「中隠」思想に対する取捨傾向と慈円との思想的繋がり

A Study of the Connection between the Acceptance and Rejection Inclination of Bai Juyi's ideology of "Mid-hermit" and Ji En's ideology in "Bunsyuhyakusyū"

邵楠*

SHAO Nan *

(摘要)

本稿は『文集百首』における白居易の「中隠」思想に対する取捨傾向と慈円の思想との繋がりについて述べる。これまでの研究は、白居易の「中隠」思想を詠む慈円の句題に関して、慈円は「中隠」思想における「中」の要素を捨て、「隠」の要素のみを吸収したと提案したものが多く。慈円の「中隠」思想に対する取捨傾向を検討する際に、「中」と「隠」との関連が見落とされる傾向がある。本稿は「中」と「隠」との関連を明らかにした上で、白居易の「中隠」思想に対して、慈円が共感したのは仕官と隠逸の中間に身を置いても、隠者と同じような真の悟りの境地に至れるということであり、慈円に吸収されない要素は「隠」が保障される前提としての「中」による物質面での保障であるということを指摘した。そして、こういった取捨傾向の背後に慈円の中に定着した「煩惱即菩提」の思想が働いていたという見解を提案した。

キーワード：「中隠」思想、取捨傾向、隠者、真の悟り、物質保障、煩惱即菩提

(Abstract)

This paper will discuss the connection between the acceptance and rejection inclination of Bai Juyi's ideology of "Mid-hermit" and Ji En's ideology in "Bunsyuhyakusyū". Previous studies have pointed out that verse about ideology of "Mid-hermit" which selected by Ji En are never selected in previous works. And, Ji En abandoned the "Middle element" and only absorbed the "Hermit" element from the ideology of "Mid-hermit". When discussed Ji En's inclination of the ideology of "Mid-hermit", previous studies seemed to ignore the relevance between "Middle" and "Hermit". This paper, on the basis of clarified the relationship between "Middle" and "Hermit", pointed out that the part of the resonance of Ji En for Bai Juyi's ideology of "Mid-hermit" is that even if one put himself in the middle of being an official and a recluse, one can also achieve spiritual enlightenment like a recluse. The elements that have not been absorbed by Ji En is the material guarantees brought by "Middle" for the "Hermit". And, behind this inclination, "Worry is Bodhi" which Ji En believed in is playing a role.

Keywords: The Ideology of "Mid-hermit", Acceptance and rejection inclination, Enlightenment, Material guarantee, Worry is Bodhi

1. はじめに

『文集百首』は慈円が建保六年(1218年)に『白氏文

集』の漢詩句を取り出して、其れを句題として百首の和歌を詠んだ句題和歌集である。生の翻案調がよく見

* 山口大学大学院東アジア研究科博士後期課程在学
Journal of East Asian Identities Vol. 8 March 2023 (pp.28-36)

られ、句題の濫觴である『大江千里集』に比べて、慈円の『文集百首』はある程度句題の束縛から逃れ、自分の思想に基づいて和歌を詠んでいる。そして、句題選択の面では、長谷完治氏は、

慈円に採られた白居易の「中隠」思想を詠む 67、68、71、74 番の句題がかつて採られたことのないものであり、白居易の中隠生活への憧憬が甚だしい点は『文集百首』の一特色と言える。

と述べた¹。しかし、白居易の「中隠」思想に対して、慈円は完全な形で吸収したわけではない。隼雪艶氏は慈円が原拠詩における仕官と帰隠の中間に身を置く、という「中」の位置の要素を捨て、隠者と同じく、精神の安寧を持つという「隠」の要素だけを吸収したという見解を提案した²。しかし、注意すべきなのは「中隠」における「中」と「隠」は独立したものでなく、関連性がある。本稿は「中隠」における「中」と「隠」との繋がりを明らかにした上で、『文集百首』における「中隠」思想に対する取捨傾向について検討を加え、この取捨傾向と慈円の思想との繋がりを考察してみたい。

2. 白居易の「中隠」思想についての再検討

「中隠」は白居易が初めて作ったものである。この「中隠」思想が生まれた背景として、中、晩唐時期、朝廷内部での党派闘争が激しかったので、白居易は平安を得ようとして、そこから逃れ、退隠を決意した。大和三年（829年）に、彼は太子賓客として洛陽に退居した。そこで、「中隠」という隠遁観が形成している。当時起こっていた「牛李党争」、「甘露の変」などのような高級官僚間の政治闘争に巻き込まれないために、白居易はどっちにも属さない、中立的な態度をとった³。一方で、こういう政治の乱脈を見極めた白居易は、「兼済」の理想が叶えないことをしみじみ感じていた。そのため、思想の面で、「兼済」の場を奪われた白居易には「兼済」思想が衰退するとともに、「独善」思想が強くなってきた。最終的に、彼は青年時代から抱いた濟世の志向を徹底的に捨て、大和三年（829年）に複雑な政治環境を持つ長安から離れることにし、五十八歳で太子賓客分司東都として洛陽に退居した。そこで、中隠生活で自分の残りの十八年の人生を送った。洛陽に退居した同年に、彼は『中隠』という詩を創作した。そこに「中隠」という言葉が初めて唱えられた⁴。

大隠住朝市、小隠入丘樊。

丘樊太冷落、朝市太囂喧。
不如作中隠、隠在留司官。
似出復似処、非忙亦非閑。
不勞心与力、又免飢与寒。
終歳无公事、随月有俸錢。
君若好登臨、城南有秋山。
君若愛遊蕩、城東有春園。
君若欲一醉、時出赴賓筵。
洛中多君子、可以恣歡言。
君若欲高臥、但自深掩閤。
亦无車馬客、造次到門前。
人生処一世、其道難兩全。
賤即苦凍餒、貴則多憂患。
唯此中隠士、致身吉且安。
究通与豊約、正在四者間。

—『中隠』 卷22 1481

当該詩から見ると、白居易が作った「中隠」とは「大隠」と「小隠」を否定するとともにこの両者の中間に介在している隠逸方式と言える。「大隠」と「小隠」を否定する理由は詩における「大隠住朝市、小隠入丘樊……終歳无公事、随月有俸錢。」から明確に読み取れる。胡山林氏の論ではこれについて次のように詳しく解説している⁵。

白居易は「小隠」を、官位を捨てて山林と田園へ隠棲することと見なし、その上で「小隠」の隠居を否定している。「小隠」という隠逸は貧しく物質的経済条件が満たされていないものなので、実際には隠逸しようにもできない。そして、彼の見るところでいわゆる「大隠」は朝廷の高官たちが終日多忙で少しの暇もなく、隠逸したくともできない状態である。「中隠」は朝廷で官位に就き、多くの俸禄をもらい、いい生活を送りながら、一方では公務も少なく閑居ができ、国家の大事に参加する必要もない、隠士と同じような行動をする、ということなのである。

「大隠」と「小隠」を否定する理由については、氏の論に従いたい。氏の説によって、白居易の「中隠」思想は隠士と同じく、精神の安寧を追求し、閑居生活を望んでも、隠士のような貧しい生活を欲しがっていないという考えに発する。彼が提唱した「中隠」とは「大隠」と「小隠」という両者の利点を兼ね備えた隠逸状態である。彼は仕官と帰隠の中間に身を置くことにする、官員としての俸禄を得て、のんびりとした生活が保障され、一方で、多忙な公務より解放されて、

精神的に安寧を享受することができる。心身ともに安寧な状態を追求する、と言える。こうして見れば、「中隠」思想が備えた「中」と「隠」という両義は独立したものではなく、関連性がある。仕官と帰隠の中間に身を置くという「中」は、精神的に隠者と同じ、安定しているという「隠」の状態にとって物質面での保障であり、逆に、「隠」の状態は「中」の究極的な目的と思われる。

ちなみに、白居易が唱えたこの独特な「中隠思想」について、批判的な態度を持っている説もある。冷成金氏は、

中隠只是借隱逸之名張目、為自己尋求一種較為安逸的生活而已、在哲學思維方式上是向庸俗的實用主義的一次退化。(大意：中隠は隱逸の名を借りて、自身の私欲を満たすことを目的とした卑俗な哲学に過ぎない。—筆者訳)

と評価した⁶。前掲の胡山林氏も

白居易は積極的に仕官するという士人精神を超越し、儒家社会の政治理想を実現するために奮励してきた過去をも超越したのである。現実の享楽と個人の悦楽だけをもっとも大事なことと考えた。

と述べた⁷。

上記の先行研究が指摘の通り、「中隠」思想はあくまで現実妥協的な隠逸である。「中隠」思想が儒家社会の積極的に仕官するという伝統的な思想に背を向けている、個人の生活の快適が何より大切で、ひたすら自身の私欲の満足を追求する、士人の持つべき社会責任感を徹底的に捨てる。この点について、筆者も異論がない。ただ、果たしてこの「中隠」思想を主張した白居易が完全に快適な生活に没入することができたのだろうか。私見では、白居易が身を置いた「仕官」から完全に離れることの出来ない状況のため、ある程度閑適な私生活を享受したが、白居易にとって、完全に快適な個人の生活に浸るのは容易ではないと思われる。なぜかという、公的側面で職務上の責任を果たすべき役人であろうと、私的側面で彼が抱いた「兼濟」の残影がまだ心に留まり、自覚的に社会、人民に責任感を持っている士人であろうと、どの立場に立っても、精神的には公務による束縛から完全に脱出することができないからである。この点について、彼の中隠生活の開始(829年)以後、中隠生活を送っている時の作の中で、脱政治的で個人の閑居生活を詠む詩が数多くあるが、以下のような社会性を帯びる作と彼の晩年の功績を見れば、その一端が窺える。まず、下記の詩を

見ておこう。

水波文襖造新成、綾軟綿勻温複輕。
晨興好擁向陽坐、晚出宜披踏雪行。
鶴氅毳疏无実事、木棉花冷得虚名。
宴安往往嘆侵夜、臥穩昏昏睡到明。
百姓多寒无可救、一身独暖亦何情。
心中為念農桑苦、耳里如聞飢凍声。
争得大裘長万丈、与君都盖洛陽城。

—『新制綾襖成感而有詠』 卷 28 2084

この詩は白居易が河南尹に就いた頃の作と推定される。百姓に深切な同情心を抱いて詠んだ詩である。詩の前半では、「水波文襖造新成、綾軟綿勻温複輕」、「晨興好擁向陽坐、晚出宜披踏雪行。」などの句が暖かなぬくぬくと綿入れにくるまれている白居易の快適な生活の有り様が描かれている。「百姓多寒无可救、一身独暖亦何情。」の部分から、彼が暖かい着物を着ている自分の私生活の満足な様子から凍えた民の苦しみに視線を転じ、特に尾句の「争得大裘長万丈、与君都盖洛陽城。」は杜甫の『茅屋為秋風所破歌』の「安得廣厦千万間大庇天下寒士俱歡顏」に発想を借り、個人の快適な生活を社会全体に共有されようと希求する。これは「兼濟」の志がまだ彼の心に留まっている典型的な感情表現と言えよう。

形適外无恙、心恬内无憂。
夜来新沐浴、肌髮舒且柔。
寬裁夾烏帽、厚絮長白裘。
裘温裹我足、帽暖覆我頭。
先進酒一杯、次舉粥一甌。
半酣半飽時、四体春悠悠。
是月歲陰暮、慘冽天地愁。
白日冷无光、黃河凍不流。
何處征戍行、何人羈旅游。
窮途絕粮客、寒獄无灯囚。
勞生彼何苦、遂性我何憂。
撫心但自愧、孰知其所由。

—『新沐浴』 卷 36 2668

この詩は838年に洛陽で作られた。貧しい百姓に対する慚愧が詩の主旨となっている。

第一句の「形適外无恙、心恬内无憂。」は身と心が達している閑適な状態を述べる。後の部分から第六句までは、こういった閑適な状態をめぐって、具体的な描写を展開してくる。それぞれ「烏帽」「白裘」「半酣」「半飽」などの語で、衣食の面で一定の満足を得ていることを描く。後半には悠然自適とした生活を送って

いることを描く前半と対比を成して、「征戍行」、「羈旅游」、「絶粮客」、「无灯囚」などの語が描いたのは身が苦境に置かれた衆生相である。こういった民の窮状に対して、尾句の「撫心但自愧、孰知其所由。」で慚愧に堪えない感情を端的に示す。要するに、「中隠」を賛美した白居易は閑適の生活を追求しつつ、私的生活の喜びと官吏として直面する民衆が身に置かれた苦境などの社会的問題との葛藤に悩まされる、個人の生活の快適には民の苦境に対する慚愧が混ざっている。

そして、「中隠生活」の背後にも多かれ少なかれ役人として果たすべき職務上の責任が存在する。これは以下のような詩から窺える。

香山石楼倚天開、翠屏壁立波環回。
 黄菊繁時好客到、碧云合处佳人來。
 酡顔一笑天桃綻、清吟数声寒玉哀。
 軒騎逶迤棹容与、留連三日不能回。
 白頭老尹府中坐、早衙才退暮衙催。
 庭前階上何所有、累囚成貫案成堆。
 豈无池塘長秋草、亦有糸竹生塵埃。
 今日清光昨夜月、竟无人來勸一杯。

—『舒員外遊香山寺』 卷22 1151

これは832年、河南尹として洛陽で閑居した時期に制作したものである。詩の第五、六句の「白頭老尹府中坐、早衙才退暮衙催。庭前階上何所有、累囚成貫案成堆。」は朝から晩まで公務に取り組む時間の長さときつさをはっきり述べ、多忙な公務の様子が集中的に表現されている。洛陽時期、閑居は白居易の生活の大半を占めたが、彼が役人として職務上の責任を果たさなければならないことがこの詩から窺える。

七十三翁旦暮身、誓開險路作通津。
 夜舟過此无傾覆、朝脛从今免苦辛。
 十里叱灘變河漢、八寒陰獄化陽春。
 我身雖歿心長在、暗施慈悲与后人。

—『開竜門八節石灘詩』 卷37 2757

この詩は白居易が百姓のために、竜門石灘で工事を行うという晩年の功績を述べたものである。この詩を作った844年、白居易が73歳で、洛陽で致仕した時期である。詩の首句における「七十三翁」は白居易自身のことを指す。当時、洛陽竜門灘の南面に「八節灘」「九峭石」という険しい灘があり、そこを通る船が石に当たるなどの危険に遭うことがよくあった。百姓がこの苦しい環境に悩まされることが白居易の注意を喚起した。

「夜舟過此无傾覆、朝脛从今免苦辛。」と民の安全を

守ろうと決意している彼は自分の貯金を使い切って「竜門石灘」を掘った。この事柄も「兼濟」の残影が彼の心にとどまっている傍証と言っても良いと思う。

830年以後、「独善」を基調とする中隠生活を送っている白居易は「閑適生活」を歌うことを主題とする詩を数多く創作したが、昔、彼が抱いた熱い「兼濟」の志が晩年になって衰退しても、完全には棄てられない。白居易は社会、民衆に完全に無関心ではない。詩に見える百姓に同情心を抱いて、悠々とした生活の有り様が自分だけでなく、世の中の困窮者に共有されると願うという自然と滲み出る感情表現の背後にやはり「兼濟」の志が働いている。また、個人生活の快適と強烈な対比を成した貧乏人の苦境に抱いた慚愧も彼の晩年に主張した「独善」と心に残っている「兼濟」の矛盾による産物と見なし得る。そして、彼が役人として職務なりの責任を果たしたことも以上の詠から察することができる。

白居易の上述の実経歴を結び付けて、逆に「精神の安寧を保つ、享樂的な暮らしを追求する」を中核とする中隠の「中」という要素を検討してみると、仕官と隠逸の中間に身を置いて直面しなければならない社会問題に触発された民衆に対する同情、慚愧などの感情はある程度「精神の安寧、享樂的な生活」の妨害となり、仕官と隠逸との中間に位置しても、やはり官界に居るのであり、それなりの公務上の職責を果たさなければならない、精神の面にしろ、身体の方にしろ、仕官と隠逸の「中」による政治性、社会性を帯びた束縛が完全に避けられないと思われる。

上記は「中隠」思想に対する概述と白居易の「中隠」生活に対する再検討である。そこで『文集百首』における白居易の「中隠」思想に対する取捨傾向と慈円との思想的繋がりを次に述べる。

3. 慈円の歌における白居易の「中隠」思想に対する取捨傾向

前掲の長谷完治氏が説かれた思想が色濃く見える67、68、74番の句題とそれに基づいて詠んだ歌を見ておこう。

【67番】

【句題】山林太寂寞、朝闕空喧煩。

唯兹郡閣内、囂静得中間。

【和歌】いづくにも心やゆかず成りぬらむただ我がやどをわがやどにして

【通釈】どこにも満足できなくなってしまったの

だろうか。そんな私にはただ自分の庵が
自分の庵として心地良い。

【句題原抛詩】

平旦起視事、亭午臥掩閤。
除親簿領外、多在琴書前。
況有虛白亭、坐見海門山。
潮來一凭檻、賓至一開筵。
終朝對云水、有時聞管弦。
持此聊過日、非忙亦非閑。
山林太寂寞、朝闕空喧煩。
唯郡茲閣內、囂靜得中間。

—『郡亭』 卷8 0358

「山林太寂寞、朝闕空喧煩。」の句において、白居易が詠んだのは山中に隠居すれば寂しいが、朝廷に居れば騒がしい、即ち、どこに居ても満足を得られない、ということである。それをもとに、慈円の「いづくにも心やゆかず成りぬらむ」もどこにも満足できない心の有り様を詠む。慈円は句題の前二句に共感している、と言える。句題の後二句に至って、白居易は最終、郡閣（郡守という閑職の居場所）を閑居地に選定する。その理由は「唯郡茲閣内、囂靜得中間。」から読み取れる。彼は寂しい「山林」と騒がしい「朝廷」の長所と短所を比較して、両者の利点を兼ね、「非忙非閑」の「郡閣」を選び出す。それに対して、慈円が詠んだ「ただ我がやどをわがやどにして」は、自分にとって閑居地として「我が宿」が心地よく、安心な場所である、という考えを述べる。

白居易と比すると、慈円は個人の快適な暮らしを獲得することを目的に、閑居地に対する取捨選択を行うことが見られない。彼が求める居場所はただ「我が宿」である。彼にとって心の平和が何より重要なことである、という考えがはっきり読み取れる。

【68番】

【句題】偶得幽閑境、遂忘塵俗心。

始知真隱者、不必在山林。

【和歌】柴のいほにすみえて後ぞ思ひしるいづくも
おなじゆふ暮の空

【通釈】山中の粗末な庵で生活してみても初めて悟った。夕暮れの空の寂しさは在俗の時となんらか変わらないと。

【句題原抛詩】

靄靄四月初、新樹葉成陰。
動搖風景麗、蓋覆庭院深。
下有无事人、竟日此幽尋。

豈惟玩時物、亦可開煩襟。
時与道人語、或听詩客吟。
度春足芳色、入夜多鳴禽。
偶得幽閑境、遂忘塵俗心。
始知真隱者、不必在山林。

—『玩新庭樹、因咏所懷』 卷8 0696

句題は幽閑の境地を得たため、真の隠者が山林に身を隠さなくても、脱俗の心境に至り得たと感想を述べたものである。慈円の場合は、山中の粗末な庵で夕暮れの空を見て感じた寂しさは在俗の時と同じと詠む。即ち、山中にしても、世間にしても、いずれのところに身を置いても、自分の心境が同じというのは慈円の歌の旨となっている。こうしてみると、慈円はある程度山林のみに隠逸することを否定するという白居易の主張に共感したと言える。

【74番】

【句題】心足即為富 身閑仍当貴

富貴在此中 何必居高位

【和歌】谷かげや 心のほひ 袖にみちぬ たかねの
花の色もよしなし

【通釈】谷陰では心から発する気高い香気が袖に充ちている。それに比べれば、高の咲き誇っている花の美しい風情もつまらないものだ。

【句題原抛詩】

世路重禄位、栖栖者孔宣。
人情愛年寿、夭死者顔淵。
二人如何人、不奈命与天。
我今信多幸、撫己愧前賢。
已年四十四、又為五品官。
况茲知足外、別有所安焉。
早年以身代、直赴逍遥篇。
近歳将心地、回向南宗禪。
外順世間法、内脱区中縁。
進不厭朝市、退不恋人寰。
自吾得此心、投足无不安。
体非導引適、意无江湖閑。
有興或飲酒、无事多掩閤。
寂靜夜深坐、安穩日高眠。
秋不苦長夜、春不惜流年。
委形老小外、忘懷生死間。
昨日共君語、与余心膺然。
此道不可道、因君聊強言。

—『贈杓直』 卷6 0267

句題では、白居易が身は世間の習俗に従っているが、

心は俗縁から超脱し、人のいるところが嫌のでもなく、世間が恋しいものでもないことを述べる。前述の句題と比べて、異なっているのは当該歌の句題に「中隠」による豊かな、快適な物質的生活を詠む部分が現れなかった点である。世間に立っても、心も脱俗の境界に達することができるのが当該句題の眼目となっている。

慈円も「身」と「心」との関係をめぐって、和歌を展開してくる。この両者について、慈円は「身のほかに我が身あり」、「心になきは心なりけり」と詠む。歌では「身」と「心」とが弁証的に捉えられ、仏教的な雰囲気漂っている。具体的に言えば、世間に立っている身の外に脱俗した身がある。世俗に執着しないところに真の心があるということである。和歌におけるこういった「身」と「心」に対する捉え方は句題と同じと思われる。

次に原拠詩に対する採句傾向から見て、下記 16、81、83 番の和歌の句題原拠詩に線を引いたのは「中隠」による物質的に保障を述べる句と言える。詩でも閑適な境地に至れることがこのような物質的に保障を離れられないのを言明した。

【16 番】

【句題】微風吹衣袂 不寒複不熱

【和歌】夏の風になり行けふの衣手に身にしまぬ色ぞみにはしみける

【通釈】夏らしい風になってゆく今日の衣の袖の、寒さや暑さを感じさせない色が涼しく感じられることだなあ。

【句題原拠詩】

我生来几時、万有四千日。
自省于其間、非憂即有疾。
老去慮漸息、年来病初愈。
忽喜身与心、泰然両无苦。
况兹孟夏月、清和好時節。
微風吹袷衣、不寒複不熱。
移榻樹陰下、竟日何所為。
或飲一瓠茗、或吟兩句詩。
内无憂患迫、外无職役羈。
此日不自適、何時是適時。

—『首夏病間』 卷 6 0235

当該歌の句題原拠詩において、「忽喜身与心、泰然両无苦。」「移榻樹陰下、竟日何所為。」「或飲一瓠茗、或吟兩句詩。」などの句は全部、身心が達している豊かな、閑適な境地に対する描写である。最後の「内无憂

患迫、外无職役羈。此日不自適、何時是適時。」に至って、白居易は閑官につき、多忙な職役による苦しみがないため、上述の悠然自適な生活が保障されると述べる。しかし、快適な物質的生活を詠む句が慈円に採られない。慈円が詠んだのは夏に吹いてくる微風の心地良さ、というものである。

【81 番】

【句題】生死尚復然 其余安是道

【和歌】きえぬるかきえぬにも又身をなしてふじのけぶりに春の曙

【通釈】消えてしまったのか、いや消えていないのかという状態に我が身をしてしまって、まるで富士の煙に春の曙が混然となっている情景のように。

【句題原拠詩】

白日下駸駸、青天高浩浩。
人生在其中、適時即為好。
勞我以少壯、息我以衰老。
順之多吉寿、違之或凶夭。
我初五十八、息老雖非早。
一閑十三年、所得亦不少。
況加祿仕后、衣食常温飽。
又从風疾来、女嫁男婚了。
胸中一无事、浩气凝襟抱。
飄若云信風、楽于魚在藻。
桑榆坐已暮、鐘漏行將曉。
皤然七十翁、亦足称寿考。
筋骸本非実、一束芭蕉草。
眷属偶相依、一夕同栖鳥。
去何有顧恋、住亦无憂惱。
生死尚復然、其餘安足道。
是故臨老心、冥然合玄造。

—『逸老』 卷 36 2674

句題原拠詩における「一閑十三年、所得亦不少。況加祿仕后、衣食常温飽。」の句は閑職につき、多くの俸禄をもらったことによって、衣食の面で満足を得られたことを示している。慈円はそういった閑職につくことによって物質的に保障されることを述べる句を採らない。彼が句題とする「生死尚復然、其餘安足道。」は生死に対して、超然として態度を表現したものである。慈円がそれをもとに作った歌に詠まれたのも人生の儂さに対する検討をめぐって展開し、我が身が富士山の煙、春の曙のように儂いという感慨である。

【83 番】

【句題】委形老少外 忘懷生死間

【和歌】おもひとくにかたちなければ心なし人てう
名をもけがしけるかな

【通釈】考え解してみるに、(年齢が表す) 形 (に拘ること) がないので (思い悩む) 心もない。(一般に人は年齢に拘り思いにとらわれるものなのに、このような私の心の有り様は) 人という名までも汚してしまったことよ。

【句題原拠詩】

世路重祿位、栖栖者孔宣。
人情愛年寿、夭死者顔淵。
二人如何人、不奈命与天。
我今信多幸、撫己愧前賢。
已年四十四、又為五品官。
況茲知足外、別有所安焉。
早年以身代、直赴逍遙篇。
近歲將心地、回向南宗禪。
外順世間法、内脱区中縁。
進不厭朝市、退不恋人寰。
自吾得此心、投足无不安。
体非導引適、意无江湖閑。
有興或飲酒、无事多掩閑。
寂靜夜深坐、安穩日高眠。
秋不苦長夜、春不惜流年。
委形老小外、忘懷生死間。
昨日共君語、与余心管然。
此道不可道、因君聊強言。

—『贈杓直』 卷6 0267

当該歌の句題原拠詩における線を引いた部分は前述の81番の歌の句題原拠詩と類似し、五品の閑職のおかげで、酒で喜び、「日高眠」で心が安定し、安穩な生活を送っている様子を述べる。しかし慈円はそれらのような閑職による閑職による閑適な生活を描く句を採らない。彼が句題として採った「委形老小外、忘懷生死間。」とそれをもとに詠んだ歌は人生の老少、生死に主眼し、それに思い悩まなく、諦観的な思いを述べる。

前に述べた如き、白居易の主張した「中隱」とは「仕官」と「隱逸」との間に身を置いて「仕官」と「隱逸」が独立したものではない、関連性があるものである。「仕官」は「隱逸」の物質面での保障であり、「隱逸」は「仕官」の究極的な目的である。句題に対する撰取と原拠詩に対する採句傾向から見ると、慈円

は白居易と同じ、心の奥に脱俗の心境、精神の安定を追求する、そして、白居易の真の隱者が必ずしも山林だけに居るとは限らない、世間と山林との間に立って、悟りの境地に至ることができるという考えに共感している。

しかしながら、上記の67番、74番の歌における句題に対する取捨傾向及び16番、81番、83番の歌の原拠詩に対する採句傾向から見れば、白居易と異なっているのは、慈円が物質的条件の良し悪しによって、閑居地を決めたわけではない。白居易の中隱思想における慈円に吸収されない要素は、心の安定が保障される前提としての中隱による豊かな物質生活、即ち、「仕官」は「隱逸」の物質面での保障ということである。

4. 「中隱」思想に対する取捨傾向と慈円の思想的繋がり

白居易の「中隱思想」は世間に置く「身」と隱者のような出世間的な「心」との間に調和点を見出そうとしている哲学と言える。慈円の「中隱思想」に対する取捨傾向もこの両者をめぐって展開してきた。この取捨傾向と慈円との思想的繋がりを探究するために、明らかにしなければならないのは「世間」に置く「身」と出世間的な「心」という両者の関係を慈円がどのように取り扱うかということである。この両者の関係について、慈円は長い体験、反省を通じて、次第に明確な形と方向をとってきた。ここで、多賀宗隼氏の論を参考したいと思う。

治承三年(1179年)に当時、25歳の慈円が比叡山の無動寺での修行を終えて、「生涯無益」という遁世観を語り出した。「生涯無益」という遁世は、氏は、

「己が煩惱をいとい、人間の煩惱と、煩惱の修羅場としての濁世をいとうに出て、これを避けて自ら清うせんとするものであり、山中にもつばら自利を求める隱者となる。」

と述べた⁸⁾。ここから見ると、慈円は世間を煩惱の修羅場と見なし、煩惱をいとい、隱者と同じく、清らかな心を求めようとする青年時期の慈円にとって、世間に身を置くことが隱者となることの妨害であり、両者が対立していると言える。しかし、後には、慈円がこの主張を翻意し、山を下りた。その動揺のきっかけについては『玉葉』(治承四年)に彼の兼実への書状として、

七宮(覺快親王)、無動寺の凶徒の事により忽ち

登山せられ了んぬ。件の張本、召出される々能はず。遂に苛法の沙汰におよば々、七宮安堵せらるべからず。然らば又、この山籠も叶ふべからざるの次第也。

とある⁹。即ち、山中の動乱が起こったため、慈円は山中の隠棲を断念して、山を下りて、世間的活動に身を投じることにした。しかし、注意すべき所は彼が断念したのは山籠という隠棲方式であり、捨てられないのは出世間的な「心」への追求である。これは、以下のような承元三年(1209年)に成立した「厭離欣求百首」における慈円の隠遁観について、山本一氏の解説からその一斑が窺える。ここで氏の見解を参考したいと思う。氏は

「山中閑居を実際に行うことによって、「心のしるべ」即ち世俗を捨離する精神態度を確立した上でならば「世の中」にも仏道は行い得る、という発想図式がここに在る。山中隠遁を絶対化するのではなく、また最初から教理的に相対化するのではなく、精神態度確立の一階梯あるいは一手段として山中閑居を捉える所に、慈円独特の隠遁観が見てとれるのである。」

と述べた¹⁰。

だとすれば、「山中隠棲」を強く主張し、俗世を煩惱の修羅場と見做す青年時期の慈円と比べて、この時期の慈円は、心理的に世間へ投身することを排斥しなくなってきた。慈円は、「山中閑居」が「心のしるべ」を確立する方式に過ぎないと考えた。「心のしるべ」は謂わば出世間的、清らかな心への追求のことである。ここに至って知られるのは山中隠棲に対する絶対の肯定から世間に身を置いても仏道も行い得るまで、変わってきたのは隠棲方式であり、変わらないのは慈円の出世間的な心への追求、ということである。

それでは、「出世間的な心」をいつまでも念頭に置いた慈円は一体どのように「世間に身を置く」ということを取り扱うのだろうか。この点について、慈円の思想の基盤をなす天台密教の教学を求めてみたいと思う。

「真俗二諦」という捉え方は、慈円の思想の基盤をなす天台教に由来している。仏法に適った真実な見方が真諦である。これに対して、世俗的な認識能力に映じる世界の在り方(世間相)が俗諦である。天台教学は、世俗的認識も根源的には仏法の悟りとは別のものでない(世間相常住)ことを説く。天台密教では真諦と俗諦との根源における

同一性(真俗一如)として述べられる。

と前掲の山本一氏が論じた¹¹。

氏の指摘によって、慈円の思想の基盤をなす天台教から由来した「真俗一如」は、世俗的認識と仏法の悟りという両者が根源的に同一であることを指すことが知られる。このように見ると、慈円の思想において、世間に身を置いて、俗世に触れることで得る認識と真の悟りは同一である。この点について、留意しておきたい。

慈円は1192年以来四度天台座主に補せられる、宮中の生活は彼の生涯において大きな幅を占めた。しかし、華やかな生活を送っている慈円にとって多賀宗隼氏は「宮中の生活があくまで一応の楽しみであり喜びであって、彼の心がその底において、満たされぬ何ものかに絶えず捉えられていたこと、それが世間的栄達、顕貴につれてますます強く逆流し始めていたことである。¹²」と説いた。氏の見解は肯うことが出来るものであり、こういった慈円の心境からすれば、世間の活動に投身しても、彼は俗世の豪華な物質生活に魅了されたわけではなく、むしろ華やかな生活がかえって慈円に心身背馳の苦しみをもたらした。心身背馳の苦しみを克服するために、慈円は最終的に、思想の転機を迎えた。慈円の中に定着した思想について、多賀宗隼氏は「長い体験の反省と回顧を通じて一つの落ち着き、一つの悟りに立っている。都にも山里がある、世間の中にも出世間がある。否、世間、出世間の二つではなく、一つの世の中、一つの人生があるでなければならぬ。菩提は煩惱の中にこそあらねばならぬ。¹³」と述べた。氏の説を参考にして、慈円の思想の基盤を成す真諦と俗諦に対する捉え方を彼の実経歴と思い合わせてみれば、彼のうちに定着した「煩惱即菩提」も彼の内面的な希求に即応した思想と言える。慈円の見出した「煩惱即菩提」思想からすれば、彼は真の悟りが世間に存在する俗世に触れて、世間的な活動に従事し、それによる煩惱を克服した体験こそを通じて、真の悟りに達することができる、即ち、世間の苦悩が真の悟りに転化できると考えた。こうして見れば、世間に置く「身」と出世間的な「心」は対立していない、世間に身を置くことが出世間的な「心」を得る手段である。これは慈円の世間に置く「身」と出世間的な「心」に対する捉え方ではあるまいか。

5. おわりに

慈円の句題に対する撰取と原抛詩に対する採句傾向から見ると、慈円は白居易と同じ、脱俗の心境を追求する。そして、慈円が白居易の山林だけでなく、世間に立っても、悟りの境地に達することができるという考えに共感している。白居易の中隠思想に対して慈円に吸収されないのは、心の平和が保障される前提としての中隠による豊かな物質生活ということである。この取捨傾向の背後には、彼の心の底に流れている思想がある。青年時代の「生涯無益」から「煩惱即菩提」まで、その根底に真の悟りへの追求が同一であり、慈円は一生にわたって、この念頭が寸刻も離れなかった。そして慈円は世間に身を置いたが、注意すべきなのは、彼が世間の栄華の生活に魅了されたわけではなく、世

間的な活動に従事することによる煩悩を征服することによって、真の悟りを求めようとする精神が彼の心に働いていたということである。即ち、慈円にとって、世間に身を置くことは、豊かな生活を送ることを目的とするわけではなく、世間に身を置くことを真の悟りの出所として捉えたという内情をとらえることが出来るであろう。

白居易詩の本文は『白居易詩集校注』謝思煒 中華書局 2017年10月」に拠る
慈円の句題和歌本文、通釈は、『文集百首全釈』文集百首研究会風間書房 2007年2月」に拠る

¹ 長谷完治『文集百首研究』（下）『梅花女子大学文学部紀要』12号 1975年2月

² 雫雪艶『文集百首』与白居易の中隠思想『外語教学』第28巻第6期 2007年11月

³ 花房英樹（訳者：王文亮/黄玮）『白居易』1991年12月 社会科学文献出版社

⁴ 下定雅弘「白居易の閑適詩—その理論と変容」『鹿児島大学法文学部紀要』鹿児島大学法文学部、1987年3月

⁵ 胡山林「白居易の中隠思想について」『九州中国学会報』35号 1997年5月

⁶ 冷成金『隠士と解脱』1997年1月 北京：作家出版社

⁷ 前掲論文5

⁸ 前掲論文5

⁹ 前掲論文8

¹⁰ 山本一「承元期の慈円：隠遁と和歌」『金沢大学教教育学部紀要人文科学社会科学編』35号 1986年2月

¹¹ 前掲論文10

¹² 前掲論文8

¹³ 前掲論文8

〈著者略歴〉

邵楠（しょうなん）

2018年大連外国語大学日本語学院修士課程終了。現在山口大学大学院東アジア研究科博士後期課程在学。